

## 旅日記（京都編）

本庁支部 中川 裕子＊

自由テーマということで、勝手ではありますが、書きたいことを書こうと思います。とは言え、書きたい事というのは書こうとすると案外難しく、結局は最近の記憶に残った京都旅行のことになりましたが、ご容赦下さい。

初日、曇り。今年初めの、旅に出る。

博多から新幹線で約3時間、京都に到着します。いつも大勢の人で混雑する京都駅。思わず自分のことは棚に上げ、観光客が多すぎるとぼやきたくなるようです。そう言いつつも、足取りはとても軽やかで、荷物を預けにお宿へ向かいました。

身軽になるとまず手始めに、宿向かいの西本願寺に参拝しました。

西本願寺は、全国一万余りの末寺を束ねる浄土真宗の本山で、正式には「本派本願寺」と言うそうです。一つ東隣の烏丸通り沿いにある東本願寺と区別するため、西本願寺と呼ばれています。元は一つだった本願寺は、その勢力を削ぐため徳川家康により二分されたとか。門をくぐって入ると、お堂の大きさに圧倒され、家康も恐れたという勢力を今に見る思いがしました。

さて、阿弥陀堂で参拝を済ませ、極彩色豊かな唐門を眺めたら、次なるスポットへ。北へ歩くこと15分、新撰組記念館に立ち寄り、親切な館長さん（京都では、マニアックで親切な方によく遭う気がするのですが、この方もその一人でした）に道を教えてもらい、新撰組壬生駐屯所（八木邸）に到着しました。



八木邸→

時は幕末、ここは新撰組発祥の地です。将軍上洛の警護として江戸から上ってきた彼らの京での宿所であり、地元郷士八木氏の住居跡です。解説の方が、新撰組誕生から池田屋騒動までの、壬生屯所での彼らの足跡を再現してくれました。

芹沢鴨一派暗殺の夜の出来事などは、まるで目の前で起こっているかのようで背筋がゾッとしました。「その夜、貴方が座っているそのあたり、そこに彼と女と寝ていたのです。」と聞き、否応にもリアルさが増してきたところで、「酔ってはいても彼も剣の達人、逃げて隣の部屋に入ろうとしたところで机に躓き、そこを振りかぶってとどめを刺そうとした相手の刀が鴨居に当たった時の刀傷がこれです。」と聞いて見上げると、刀傷アリ。刀が当たるカツツという音が聞こえそうで、ゾクゾクしていました。こうして

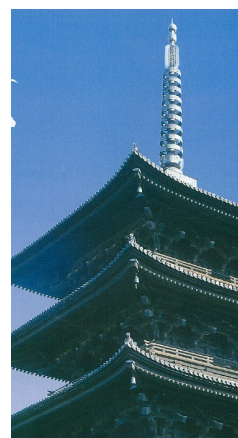
全身が寒くなったところで、最後に隣の和菓子屋「京都鶴屋」で抹茶と和菓子を頂ける、気の利いたコースになっていました。(1,000 円/人)

そこから通り向かいの武家屋敷「旧前川邸」を見学したところで、タイムリミット。

2 日目。昨夜からの冷え込みで、朝から雪。寒さに弱い私も、グレンデと京都では元気なのです。

まずは、宿から南へ歩いて約 15 分、東寺へ向かいました。ここは、平安京遷都の際、羅城門の東西に置かれた東の大寺で、真言密教を体得した空海（弘法大師）がこれを賜り、他利行としての祈りの場としていたそうです。仏と神が居並ぶ、密教の言う浄土の世界を表現した立体曼荼羅を目前にすると、こんな私でも不思議と心落ち着くものです。外界と塀で区切られた雪降る東寺は、静かに壮麗で、浄土の入り口とも錯覚しそうです。

お庭を歩いて五重の塔へ足を運んでみれば、運良く特別公開中で中に入ることができました。耐震構造に組まれた塔は火災で 4 度焼失したにもかかわらず、地震で崩れたことはなかったそうです。今見る塔は徳川家光が再建したものです。内部は色とりどりの模様が施された小部屋で、心柱を取り囲んで仏様が鎮座している異空間でした。再建当時、さぞ美しかったであろうと想像される所です。人でも物でも見た目は時と共に朽ちていくものだと思感すると同時に、余計なものが無くなって返ってよく見えるとも思われるのでした。



↑ 東寺五重塔

東寺を出てすぐ、観智院に立ち寄ってみました。ここは今から 700 年程前に建てられた勤学所で、学問成就の願掛けに多くの人々が参拝に訪れています。中は書院造の小部屋と坪庭が迷路のように入り組んだ造りになっており、吸い込まれるように各部屋に足を踏み入れては、雪見障子からお庭を眺めたりしていました。

そうこうするうちにお腹も鳴ってきたので遅い昼食を済ませ、タクシーで三十三間堂に向かいました。

三十三間堂は後白河法皇の院政庁に平清盛が造進したもので、正式には蓮華王院といいます。本堂が三十三間（約 120m）もあり、中には 1001 体の仏様が安置されている所です。中に入ると思わず、仏様の多さに口があぐりと開いてしまいました。ずらりと居並ぶ「十一面千手千眼観世音」。通常たくさんないものがあまりたくさんあると、妙な気分になるものです。中央の巨像を挟んで左右に 500 体ずつ、合計 1001 体。つい、計算したくなる衝動に駆られます。仏様の目の数は、 $1000 \times 1001 = 1,001,000$ 。とにかくここでは、やましい心も恥かしい行いもすべて見透かされているようで、120mを一気に走り抜けてしまいたい反面、去り難い、奇妙な気分になりました。

夕暮れを間近に感じ、少々焦りながらも徒歩で六波羅蜜寺へ向かいました。急ぐ途上、豊国神社や五条通沿いの陶器屋さんに寄ったため、ギリギリセーフで到着。

ここでは、歴史の資料集等で一度は見たことのある衝撃的な像が見られます。口から六体の仏像が現れたという伝承を表した、空也上人立像です。他にも経文を手にした平清盛像他が見られます。一日の最後に、思わぬ人に遭遇した喜びに包まれていました。

最終日、晴れ。寒さは残っているものの、足元軽し。

旅最後の日の、ちょっとアンニュイな気分のままバスで東山方面へ。今回は銀閣、南禅寺より少し北にある、光福寺、詩仙堂などを見て歩きました。どのお庭も素晴らしく、いつまでも東山から望む京都の町を見納めかのように眺めていました。

どうしてこんなに京都に惹かれるのだろうか、その謎は今回も解けないままでした。けれど、再び来るときのためにもその方がいいのかもしれない。

以上、長くなりましたが、最後まで読んで頂き有難うございました。

＊建設技術情報センター 土木技術課道路係